

地域に根ざしたカボチャ農園活動と防災教育を通じた ESD

北海道北広島市立西部中学校

校長 小森 享

担当 小林 淳 (教頭)

1, 本校の ESD の特徴

ESDの基本的な考え方として、「持続可能な社会づくり」の担い手を育む教育の重要性があげられていますが、その実践には次の2つの観点が必要だと考えています。一点目は、人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと、もう一点は、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むことです。



本校としては、ESD の目的である「持続可能な社会」を目指し、「人間性」と「社会性」を育むために地域に根ざした環境教育と防災教育の二本をメインとしてユネスコスクールとしての活動を行っています。また、本校は全道で二番目にコミュニティ・スクールに指定された学校でもあり、地域の力を活用したコミュニティ・スクールとしての取組とリンクさせながら活動を行ってきました。

2, 活動計画

・カボチャ農園活動	全学年対象	5月～10月
芽立て集会 (5月)		
農園土起こし・整地 (5月)	地域の方のご協力	
移植集会 (6月)		
収穫集会 (9月)		
・校外学習 (ねらい：環境保全)	中学1年対象	7月
・CS災害図上訓練	中学2年対象	8月
・CS防災訓練	中学3年対象	9月
・書き損じハガキ回収	生徒会活動	12月
・カレンダーリサイクル市	生徒会活動	1月
・除雪ボランティア	生徒会活動	1月
・各種講演会(人権・国際理解)	全学年対象	未定



3, 活動事例

① カボチャ栽培を通じて行う地域に根ざした環境教育

全校生徒全員で、カボチャの種を植え、芽を出させ（芽立て）、教室内でしばらく発芽ポットで各自育て、双葉から本葉になったら農園へ移植します。農園作りは地域の方が事前に堆肥や土壌改良材などを入れた畑をトラクターで耕し、整地してくれます。本校職員や環境委員、特別支援学級の生徒の力も借りて、畝をつくり、マルチシートを張っておき、学年ごとに丁寧に苗を植える移植集会を行います。適宜水やりや草取りを行い、成長したらカボチャ収穫集会を行います。採れたカボチャは磨いて陰干しし、普段は①販売（特別支援学級による販売実習やANA オープンゴルフによる販売実習等）②寄贈（地域の施設へ給食センター）を行います。新型コロナに関わって2021年度は販売を控え、育てたカボチャを各自1個ずつ持ち帰り、給食センターに寄贈した物を調理してもらい、給食でおいしくいただくことができました。



② コミュニティ・スクールとして行う防災教育

本校では小学校6年生と中学校3年生というスクールリーダーを対象とした合同防災訓練を行っています。この防災訓練はコミュニティ・スクールの活動として位置づけられ、CS委員でもある消防隊員や消防分団員、その他西部地区CS委員の方々が主となって当日の訓練を運営します。



まずは、搬送訓練です。身近なもの（Tシャツ・トレーナー・棒・椅子・毛布）などを使ってどうやって傷病者を搬送するか小学生と中学生が考えながら協力して運んでいきます。CS委員の方々は運ばれる役をしてくれたり、近くで安全を見守ってくれたり、助言をしてくれます。そして、バケツリレーも体験します。消防隊が用意してくれた数トンの水をどうやって運んだらいいのか学習します。CS委員の見本を受けて小中が一緒になって取り組みました。その数日後、総合的な学習の時間を利用して、小学校と中学校で西部地区の防災宣言を考え、交流しました。防災訓練の経験から地域の防災を身近な問題としてとらえ、地域の中の自分たちの役割について真剣に考えることができました。

4, 成果と課題

令和3年度全国学力学習状況調査の生徒質問紙で、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがありますか」という問いに対して「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」を選んだ割合が、全国平均が43.7%に対して、本校は94.3%と非常に高くなっています。ユネスコスクールとして取り組んでいる地域を巻き込んだ活動もその要因の一つと捉えています。また、今年度は配布されたESDパスポートを活用し、ボランティアに取り組んだ時に、感想等を記入し、担当者が印鑑を押すという取組を行っています。「自ら進んで行う活動」を今後も課題として取り組んでいきます。